

沼

白沢智恵子歌集

沼

白路叢書第121篇



現代書房新社

著 者 略 歴

昭和3年(1928)東京練馬生まれ、横浜で育つ。東邦女子医学専門学校卒業。現住所にて産婦人科医院開業。昭和39年白路入社、同人。

歌集 沼 白路叢書第121篇

1995(平成7)年6月30日 発行

著 者 白 沢 智 恵 子

〒374 館林市緑町1-2-5
電話 0276-72-1600

発行者 内 田 紀 満

印刷者 浅野慎一／真山武 製本者 市川八朗

発行所 (株) 現 代 書 房 新 社

東京都千代田区神田鍛冶町2-9-7

1955 Chieko Sirasawa Printed in Japan 非売品

序 文

越 沢 忠 一

待望久しかった白沢智恵子さんの歌集が、この度、めでたく世に出ることになった。名づけて「沼」。なんと静かな、こころ休まる名前であろう。心からお祝い申し上げたい。彼女の歌集には、あるいは、他にもっと適当な人がおられるかも知れないが、長年の白路の誼で、序文を草することになった。だが、折角の処女歌集を穢すことを、ひそかに恐れている。

白沢さんは、森本治吉先生がまだまだお元気でご指導下さった頃からの同人で、歌歴も三十余年になる。この間、詠まれた歌はかなりの数にのぼるが、今回その中から五百七十余首を選んで、このような立派な歌集の出版となったわけで、著者の喜びはもとより、泉下の治吉先生もさぞお喜びのことであろう。

作品は長年の医師の仕事を中心に、日常生活と折々の感慨を、彼女の住む館林周

辺の景物に託して、風土色豊かに詠ったものが多く、また、配列もほぼ発表順に従っているので、世の中の変化や歌境の進展の様子なども知ることができて、読者にとって大変興味深い。

白沢さんは、先年院長職を継がれた、ご主人実氏を助けて、産婦人科白沢医院の経営や診療に、また、家庭の主婦として寧日ない方であるが、先ず、その医師の歌から眺めて見たい。

天職と思へと己に言ひ聞かせ深夜分娩に起きて出でゆく

頭位分娩出血二百と記しゆく明るき朝となりたる分娩室へやに

オリブ油に胎脂拭へば桜色の肌あらはるるあはれみどり児

早暁の分娩室を出で来れば外はしんかんと雪降りてゐき

これらの歌を読むと、天職と自らに言い聞かせ、医療に励む厳しい医師の姿と、その仕事を為し終えた満足感を静かに噛みしめている、一人の優しい女性の姿が彷彿とする。

医師の仕事は、たしかに平坦ではない。緊急手術を要することもしばしばである。

手術への気負ひを乗せて三角巾きりと結ぶ前髪上げて
切り開けば濁る羊水あまた出で胎児の仮死の徴候の見ゆ
娩出の時もどかしも臍帯の搏動みとめ切断急ぐ

刻々の情況を的確に判断しつつ、処置を急がねばならぬ医の仕事は、まさに真剣勝負そのものと言える。「三角巾きりと結ぶ」に、その決意の程を見ることができさる。

外来や入院患者の診察、回診なども、こうした仕事と併行して行われるようであるが、この忙しさの中にも

羊歯状の像あざやけし排卵のありやとのぞく倍率高めつつ
胎動の自覚なき妊婦に児の心音ドップラ法に音高く聴かす

かもしかの如歩みゆく看護婦の後を追ひつつ午後の回診

検診の乳児の目線みな同じ恋人のごとママを見上ぐる

の如き充実した楽しみもある。生き甲斐が感じられ、新鮮で誠に爽やかだ。
還暦を過ぎて、医の業をふり返る彼女の感慨もまた深い。

指先に眼のある如くなりたしと内診に励み三十年過ぐ

今日何か白衣脱ぐ日を意識しつつ墮胎の手術事なく終ふる

残照の仄赤き空目守りをり医療過誤なく年逝かしめて

医の業を手伝はむと子の帰る日を心の扉あけて恃める

最後の歌のご子息は、二人とも立派に独立して、現在、千葉大の第一微生物、あるいは、東京都老人研究所分子病理室の医師として、基礎医学の研究に従事されている由であるが、子を持つ思いは誰しも同じこと、殊に母親としては、真実偽らざる心情であらう。

さて、私は始めに彼女の医師の作品を見てきたのであるが、読みながらこれは大変個性的な歌集だと直感した。というのは、最近の歌集を見ると、入院や療養生活など、患者の方からの歌がやたらに多くて、医療を行う側の作品は極めて少ないように思われる。まして産婦人科の歌などは皆無に近く、誠に貴重である。それ故、これらの作品が一層新鮮に目に映る。この医師の歌こそ、私は本歌集第一の特色と言つてよいのではないかと思う。

第二の特色と言えば、やはり、著者が歌集名に迄選んだ「沼」の作品であろう。

ここに嫁し住みて三十年浜つ子がわが物顔に沼辺もとほる

吾に向き沼波は寄すひたすらに沼の子となる休日の朝

着水の音さはやかに響かせし鴨の一羽が遠ざかりゆく

をりをりの心の色に見ゆるもの今朝の沼面はシルバーグレイ

白鳥二羽浮き彫りにして日の暮れの沼面刻々黒ずみてゆく

これはまた、医師の厳しさを離れた、魂の休まるような作品である。あとがきによれば、二人の息子を大学に送り出し、家事からも漸く解放された佗しさから、仕事の暇を見ては出掛けるようになった、近くの沼の散歩が、いつの間にか、医師の仕事の緊張から彼女を解き放し、心の安らぎを回復させてくれる大切な存在となっていたようである。

横浜育ちの、所謂浜っ子の彼女は、物心ついた頃から、山の手の美しい風景や港の海を友として成人したという。集中の連作「雪吸ふ海」は、その憧れの故郷を訪うた折の佳品であるが、他にも「春風に吹かれて横浜港見ゆる丘歩きてみたしその

日はひとり」など、ふる里を偲ぶ秀れた作品が多い。

ところで、私は、これら浜の歌には、一種、沼の作品に通うものがあるように思えてならない。恐らく、それは、わが物顔に沼辺を散歩する著者の姿が、即ち、横なと浜港を徘徊する彼女の姿でもあるように、両者は常に、強い故郷回帰の心の糸で結ばれているからではあるまいか。だからこそ、彼女にとって沼を詠うことは、青春の地のふる里へ帰ることであり、それによって疲ついた心は癒され、生きる力が蘇るのである。

著者が長年に亘って、殊に女性にとっては厳しい医師の仕事と家庭生活を立派に調和させ、素晴らしい人生を築いて来られたのも、この心が大きな支えとなっていくように、私には思われる。この様に、一見歌相の隔たるように見える匠と沼の作品が、集中で自ずと響き合って、一冊の歌集として見事な統一を見せていることも、本歌集のもう一つの大きな特色と言えよう。このような家庭の家族の歌もなかなか豊かである。

難手術する気重さかギター弾く夫の横顔われは見守る

この夕焼けを浴びつつ吾子も帰らむか重き鞆を両手にさげて

離りゐし子も帰り来て飯を食む心ひとつになれる時かも

「遣伝子が冷蔵庫にあるの」と幼孫父の研究をひそかに告ぐる

夫への労りの心、親子の強い絆、孫を見守る眼差し、いずれも温く心に沁みてる。最後の、お孫さんを囲む、医師の家庭の一コマが、また実に楽しい。

旅行詠にもしばしば心を誘われた。

仄暗き空に満月と星静か午前八時のセビリアの朝

使ひたるままにアトリエ保存され古びし頭蓋三つ置かるる

など、それぞれの旅行地の特性の把握が的確で、且つ詩情もある。何よりも歌が情に流されていないのがいい。著者の持つ優れた描写力の賜物と言えよう。

最後に、最近の歌に少し触れてみたい。

太幹ゆ直ちに梅の花咲けり命噴き出づる思ひに見つむ

沼中の真菰のゆらぎ老眼にかつと見てゐる終戦記念日

これらの歌は、従来もののに、更に内面的なものが加わって、充実感漲る白沢短

歌の新しい息吹を感じさせてくれる。これは実に嬉しいことで、近い将来、彼女が太幹に見事な花を咲かせる日が来ることを、強く期待しつつ見守ってゆきたいと思う。

求められるままに一文を認めたが、非才にして、著者の期待に十分添い得なかったことを悔やんでいる。歌集「沼」への散策の道は、他にも色々あるに違いない。どうか、この歌集を繙かれる方々には、各自思いのままの楽しい道を辿られて、十二分に「沼」の神韻に触れていただくようお願いし、白沢短歌の更なる発展深化を心から念願して、拙い文を終わりたいと思う。

平成七年六月吉日

沼

目

次

序文——越 沢 忠 一

I 一九六四～一九七四

新しきランドセル 23

木枯らしの音 25

都会の生活に 29

この夕焼けを 33

苦渋の涙 35

人間商売 39

赤き残照 43

ルバングの兵

46

Ⅱ 一九七五～一九七七

早朝の補習

51

法師の里

52

進学相談

54

街灯の明かり

56

芝桜

58

心臓発作

61

卒業証書

63

本命の試験

65

秋田歌会

69

森本治吉先生逝く

72

新しき友

74

Ⅲ 一九七八～一九八二

仔犬

79

野菊の墓

81

フラメンコ

83

秋篠寺

87

元朝の寺院

91

チトー大統領の墓

93

黄菊

95

だるま市

97

セザンヌ・アトリエ

100

柿の花

102

太宰府

105

Ⅳ 一九八三～一九八六

足尾吟行

109

をどり子草	137
雪吸ふ海	133
たこ焼き	130
常並の年	129
眼のある如く	126
駅前通り	123
医王寺	121
出島の如く	118
鴨の群	115
吐血	111